

連島町の生んだ薄田泣菫の顕彰活動

薄田泣菫顕彰会

活動の目的

日本の近代詩である「新体詩」は、明治30年（1897）に島崎藤村が第一・第二詩集を出して始まり、32年4月に土井晩翠が、同年11月に薄田泣菫がそれぞれ第一詩集を出して陣容を整えた。これに対して日本の近代音楽習得は、明治末の山田耕筰のドイツ留学により始まると言ってよく、日本人の音楽家が歌曲・童謡の作曲に力を入れ始めたのは1920年代、大正時代の後半からであった。

泣菫は、明治39年5月に第4単行詩集『白羊宮』を世に問うた後、次第に詩作が困難になった。従来の泣菫の詩は、美しい詩語を探してどんどん古典を遡ったことから、当初から「難解」との評もあった。しかし『白羊宮』には、象徴詩風、民謡体の詩のほかに、かなりの叙情詩が収められた。結婚を決めた泣菫の心境の変化もあろう。またこの頃から、「子守唄」と題する詩も書き始めている。その結果、泣菫の叙情詩と子守歌に、山田耕筰、清水脩、弘田龍太郎などの作曲家達が曲をつけ、「泣菫の歌曲」が辛うじて残された。

活動の内容及び経過

4月22日、水島愛あいサロンで14時から2時間、歌曲演奏会「泣菫を詩う」開催。主催者の用意した150席の椅子が足りなくなり慌てて追加、聴衆（約200名）が会場一杯になる盛況に感動した。

この「泣菫を詩う」会は、内容を2部に分け、第1部を泣菫の作詞4題（「寂寥」を弘田龍太郎と梁田貞の作曲で2題都合5曲）、第2部を「ゆかりの詩人・作曲家」のもの5曲で構成し、歌曲の冒頭に「薄田泣菫、その時、その人」、「同時代の詩と曲」と題した、15分間の「おはなし」朗読を付したが、ソプラノの奥野純子さんのアイディアであった。

これは実際に行って初めて理解したのだが、「おはなし」は、「難解な泣菫の詩を理解してもらおう」ではなく、「難解さを理解するムードを持ってもらおう」という目的だったのである。そのムードさえ出来上がれば、あとは歌唱の「実力」が聴衆を魅了する。このことは、目的を追う道筋について、もっと深く考えるきっかけとなった。

活動の成果・効果

小学校4校、中学校1校による「小中学生による泣菫詩朗読会」は昨年で既に13回を重ね、定着したと言っていい。これは長い時間をかけてその効果を見守って行く一つの方法だが、今回の参加者が60歳、70歳代が79%というアンケート結果を見ると、50歳代以下への働きかけを真剣に検討すべきであることが、改めて重要な問題点となる。



今後の課題と問題点

アンケート結果から見ると、今回の催しの開催を知ったのは「友人知人」からの情報が34%、新聞ニュースが32%で、「チラシ」が21%とある。新聞が採り上げてくれるのは非常に大きいですが、友人知人の誘い合わせがそれを少しでも上回ったことは、日頃の活動の大切さ、一緒に関わる活動の多彩さなどの点で、会の活動そのものをもう一度見つめなおし、考え直すことがあるような気がする。

- 代表者：山田錦造 ●所在地：倉敷市連島町矢柄
- TEL：086-445-0974
- 設立年：2001年 ●メンバー数：会員数200名（世話人18名）